第３回「フォーラム人間科学を考える」の開催について

開催校責任者　札幌学院大学人文学部
奥　谷　浩　一

第３回「フォーラム人間科学を考える」は、さる1997年９月13日と14日の２日間にわたって、北海道江別市の札幌学院大学において開催された。

「フォーラム人間科学を考える」とは、1995年に、人間科学部をもつ全国の８大学、つまり早稲田大学、大阪大学、常磐大学、東洋英和女学院大学、大阪国際女子大学、愛知みずほ大学、文教大学、神戸女学院大学が呼びかけ人になって発足したゆるやかな組織である。その呼びかけの趣意書には、人間科学の名称をもつ学部・学科の数がかなり増えていながら、大学どうしのあいだで人間科学にかんする学問的理解がいまだに必ずしも一致しておらず、そのことがある種の可能性ととまどいとを生じている現状をふまえ、人間科学とは何かという疑問に答えるとともに、それぞれの大学における人間科学の教育研究の経験を共有することに努めようということがうたわれていた。第１回のフォーラムは、早稲田大学の総合学術情報センターにおいて同年12月９日に、第２回目は同じく早稲田大学の所沢キャンパスにおいて翌1996年７月６日に開催された。1997年は、札幌学院大学人文学部の創立20周年にあたることもあって、第３回目のフォーラムは、私共の大学で開催をお引き受けしたいという要望を呼びかけ人の諸先生にお伝えしたところ、諸先生が私共の希望を快くご承諾くださり、本学での開催の運びにいたった次第である。

本学で第３回目のフォーラム開催を引き受けるにあたって、私共が考慮したいくつかの点があった。その第一は、過去２回のフォーラムでは人間科学の学部または学科をもつ大学どうしの経験交流が主たる課題であったのにたいし、今回は、人間科学会とまではゆかなくても、たんなる経験交流の段階を超えて、個人研究発表などを行事に組み入れ、たとえ試行錯誤ではあっても人間科学をめぐる学問的な議論に多少とも踏み込んだ討論を行いたいという点であった。もうひとつは、これまでは、半日で全日程を終了していたのだが、諸先生がご多忙のなかをはるばる北海道まで来られるからには、ささやかながら懇親会で北海道ならでは食事を味わっていただき、また日程の規模を拡大して２日間にわたってじっくりと討論をしたいという点であった。

ともかくも、開催校責任者として、本学開催の第３回フォーラムが２日間にわたり、のべ69名（高校生、市民を含む）の参加を得て無事日程を終了したことに、心より感謝を申し上げた

い。そして、今回が過去２回と比べて多少とも特色を出せたとすれば、これもまた、本学での開催にご賛同・ご協力いただいた呼びかけ人の諸先生方、そして遠路はるばるこのフォーラムに参加して報告された諸先生、また討論に参加してくださった皆様全員のおかげでありますことを心より感謝申し上げたい。

思い起こせば、およそ十年前の1988年10月14日と15日の２日間、札幌学院大学人文学部創立10周年を記念して、「人間科学の確立に向けて」と題するシンポジウムと経験交流会が本学において開催されたのであった。これは、人間科学にかんする、複数の大学を横断して行われた、我が国初の意義深い公開シンポジウムであったと記憶するが、パネラーとして当時、大阪大学教授の徳永恂先生、文教大学の水島恵一先生、慶応義塾大学大学名誉教授の沢田允茂先生、それに本学人文学部教授の中野徹三の４人の諸先生が名を連ねられた。実は、この思い出深いシンポジウムの司会を務めたのは私であった。私がこのシンポジウムを締めくくった言葉は、その報告書にあるように、このシンポジウムを一回限りで終わらせないで、人間科学部・人間科学科を有する諸大学のあいだで人間科学にかんする学問的討論をぜひとも継続して受け継いでいってほしいということであった。その願いが、かたちを変えて、「フォーラム人間科学を考える」における議論の継続となって実現していることは、私にとってまことに喜ばしく、また感慨無量なものがある。

第４回以降の「フォーラム人間科学を考える」における、人間科学にかんする学問的論議の発展と深化を、そして我が国における人間科学の教育と研究のますますの発展を心から期待するものである。